

『ヴェニスの商人』

——シャイロックの喜劇的役割——

大 島 芳 材

序

『守銭奴，潔癖症，偽善者，衒学者，俗物，これらは自分が何をしているかよくわかっていない人達であり，警戒心が強く自己に形式的態度を強制し，それに固執する滑稽な人物である。よってこの場合，我々が道德的規範と呼ぶものは道德性ではなく，道德的拘束からの解放のことである。喜劇は悪を非難するのではなく，自覚の欠如を嘲笑するのを目的にしている。よってシャイロックの悪徳を，喜劇として見ると同様に，マルヴォーリオやアンジェロの美德も，喜劇になるのである。』¹⁾

ノースロップ・フライ (Northrop Frye) のこの言葉は，シェイクスピアの喜劇のみならず，他の喜劇にも通じる喜劇論である。悲劇では徳の高い人間が，不運に転落する悲哀を描くので，善が悪に亡ぼされる矛盾，つまり道德の問題が問れるのが常である。しかし一方喜劇では，人間の運命を描くのではなく，異常な人間を滑稽に描いて，嘲笑し風刺することが目的となり，よってそこには道德は問題とならなくなり，その代り道德に拘束されている不自然さから解放される明るさが，判断の基準になるといえる。よって喜劇は，異常な人物がたとえ同情を誘うような面があろうとも，それに反応を示すことは間違いで，あくまで風刺と嘲笑の対象として見るのが喜劇の見方である。『ヴェニスの商人』

(10)

のシャイロックは、貪欲なユダヤ人であり、キリスト教徒の命を奪おうとする冷血漢であるが故に、彼の立場に同情するとすればそれは間違いである。彼に悲劇的な哀みを感じるのではなく、喜劇的な可笑しみを感じるのが正しい見方である。だが彼は風刺や嘲笑の対象として観察できるであろうか。同情の余地は全くないといえるであろうか。そして一方のアントニオ、バッサーニオには、この事件に何ら責任がないといえるであろうか。彼らは金銭欲のない清廉な人物であり、また嫉妬や憎悪をもたない人間であるといえるであろうか。この作品は喜劇と解釈するには、いくつかの問題があって、そのため評価のしにくい作品であるところは誰しも認めるところである。

またこの作品は人命に関わる事件を、裁判によって結着させるという現実性があるにも拘らず、ロマンチックな要素があって、両者が混然と融合しているドラマでもある。それは架空的な非現実的な事件が織りこまれていて、読者や観客の気持を魅了するからである。ポーシヤの結婚相手を決めるための箱選びの話、バッサーニオがポーシヤを射止める愛の物語、また第五幕でのロレンゾウとジェシカの二人が月光の下で恋の喜びと音楽の不思議について語る場面、これらは裁判に発展する事件とは別に、この作品にロマンスを十分に与えている。虚構と現実という二面性をもつこの作品は、どのような解釈をすべきなのか。喜劇としての解釈と合せて、以下その問題を考察してみたい。

シャイロックとキリスト教徒

シャイロックとアントニオの対立の背景には、人種と宗教の違いがあるのはいうまでもないことである。そしてこの相違は、生活、風俗、風習、思考の上にも対立を生じ、それらが両者が互いに抱いている憎悪や敵意を、一層深めていることは疑いのないところである。だがユダヤ人とキリスト教徒との対立という設定は、歴史的事実であり、英国人はこの問題を十分に意識していたといえる。ユダヤ人はすでに11世紀のノルマン王朝の時代に英国に入り始めて、彼

らは金融を職業とし、特定の区域に集って生活していた。キリスト教徒は利息をとる職業が禁じられていたので、ユダヤ人は利益を貪る人種として蔑視されていたが、彼らの財力は侮り難く、むしろこれを英国人は利用していたというのが事実であった²⁾。13世紀になると経済状態が変化して、彼らの必要性が薄れ、それに人種、宗教の違いの生じる問題を断つために、エドワード一世は彼らに国外退去を命じた³⁾。だが彼らは全くいなくなったわけではなく、依然として少数であっても、ロンドンやその他の都会に生活していたことは事実であった。シェイクスピアの時代には、彼らの勢力がどれくらいあったかわからないが、差別や憎悪の対象として残っていたことは確かなようである。

また当時エリザベス女王の侍医をしていたロデリゴ・ロペツ (Roderigo Lopez) というユダヤ人の存在が、英国人に一層の憎悪と不信を抱かしたのには疑いのないことである。ロペツはスペインから来ていたアントニオ・ペレツ (Antonio Perez) という術学者ならびにその庇護者エセックス伯 (The Earl of Essex) と不和を起し、そこでアントニオを暗殺しようと企てたことがあった。更に彼はエリザベス女王の暗殺に関与し、その計画を謀る一味から、賄路を受けとったという疑いをかけられ、拷問にかけられてその罪を自白し、1594年6月7日に処刑された。この事件は『ヴェニスの商人』と類似するところがあり、それにこの作品の創作年代は1594年から98年の間であろうと推測されていて、シェイクスピアはこの事件を知っていて、観客の反応を計算に入れて彼は書いたものと察せられる⁴⁾。

だがユダヤ人がキリスト教徒に金を貸して、それが返せなくなり、キリスト教徒の胸の肉を1ポンドを要求する話は、昔から伝説として知れ渡っていて、それを題材にした劇が当時すでにあっただろう。スチーヴン・ゴスン (Stephen Gosson) が1579年に表わした『悪口学校』 (*The School of Abuse*) の中には、『ユダヤ人』 (*The Jew*) という劇についての言及があり、それに「俗なる選択者の貪欲と高利貸の残忍な心が表われていて」⁵⁾ とあるが、するとこの

(12)

『ユダヤ人』という劇が、シェイクスピアの作品の基礎になっていたと想像することができる。

しかしシェイクスピアが用いた素材として、もっと『ヴェニスの商人』に近いものがある。それはセル・ジオヴァニ (Ser Geovanni) の *Il Pecornne* という物語集の中の一つである。これにはバツサーニオに相当するジャネット (Giannetto) が、育ての恩人アンサルド (Ansaldo) の援助で、ベルモントの美女に求婚する話がある。彼は賭に敗れて失敗するが何度も試み、そのためアンサルドの資産を使い果し、ユダヤ人に一万ダカットの借金をする。求婚はついに成功して幸福を手に入れるが、借金の返済を忘れ、そのためアンサルドはユダヤ人によって、証文通り胸の肉1ポンドをとられることになる。このとき法学博士に変装した妻の巧妙な処置により、この危難を逃れることになる。最後には法学博士に妻からもらった指輪を所望され、ジャネットはそれをやむなく与え、あとで妻から指輪の紛失を咎められ、苛められる喜劇もついている。この原話は1378年に書かれて1558年に出版されているが、英訳されるという記録は現在残っていない。シェイクスピアはあるいはイタリア語で読んだかも知れないし、あるいはこれにもとづく英語で書かれた作品があって、それをを用いたかも知れない。どのような方法がとられたにしても、シェイクスピアはこれに頼っていることは確かである。

ユダヤ人といえばマーロウの『マルタ島のユダヤ人』 (*The Jew of Malta*) は、1589年頃に上演されているので、この影響も見逃すことはできないであろう。この劇は冷血漢バラバスの野心と物欲の実現と失敗を描いているが、ヒーローであるユダヤ人は、滑稽な悪人という印象が強く、アン・バートンは a *figure of fantastic evil* と呼んでいて⁶⁾、英国人がユダヤ人にもつ一般的通念とはやや違ったものであろう。また娘アビゲイルがキリスト教徒を愛したのを怒り、殺害してしまうところは残忍すぎるとさえいえるであろう。だが傲慢ともいえるキリスト教徒への強い反感、屈従を強いられて生きたユダヤ民族の

怒りというものがこの作品に認められる。これらはシャイロックの性格創造として用いられたことは否定できないであろう。

キリスト教徒から見ると、シャイロックは、ユダヤ教を信じる貪欲で無情な高利貸のように見え、よって悪徳の権化のように思われる。だがシェイクスピアの劇では、むしろ同情を誘うように描かれているのが特徴である。彼はキリスト教徒の利息なしでの金融が、ユダヤ人の商売を邪魔していること、そしてそれが長年の怨恨となって積み重なっていることをまず嘆く。

How like a fawning publican he looks!
I hate him for is a Christian,
But more for that in a low simplicity
He lends out money gratis and brings down
The rate of usance here with us in Venice.
If I can catch him once upon the hip,
I will feed fat the ancient grudge I bear him.
He hates our sacred nation, and he rails,
Even there where merchants most do congregate,
On me, my bargains and my well-won thrift,
Which he calls interest. Cursed be my tribe,
If I forgive him! (I. iii. 41-53)

まるで尻尾を振って阿^{おもね}る税吏のようではないか!
あいつがキリスト教徒だから憎らしい。
だがもっと憎らしいのは、馬鹿^{づら}面して頭を下げ、
利息をとらずに金を貸し、おかげで利率が下り、
ヴェニスの我々を困らせるからだ。
もしも奴の弱点を捕らえるならば、

(14)

昔からの恨みを晴らしてくれよう。
奴は聖なるユダヤ人を憎んでいるし、
商人の集る処で俺のことを罵りやがる。
それに堂々と得た儲けを、利息だと
呼びやがる。あいつは許しておけねえ、
絶対に許せねえぞ！

シャイロックはアントニオから受けた屈辱をじっと我慢して来た。「忍耐を自分たち種族の標^{しるし}として耐え」⁷⁾ながら付合ってきた。だがそれにもかかわらずアントニオは、彼を「邪教の信者、人殺し野郎」⁸⁾と呼び、「ユダヤ人の着る衣服に唾を吐き」⁹⁾それも「自分で得たものを自分で使うからという理由で」¹⁰⁾邪険に扱って来たのである。そしてアントニオもそのことを認めていて、「お前をまたそう呼んだり、唾を吐きかけたり、蹴飛ばしたりするかも知れぬ」¹¹⁾とさえいっている。

シャイロックと対立するキリスト教徒は、最初のうちは決して好感のもてる人物に描かれていない。バツサーニオは財産を使い果し、上流階級から脱落する恐れを抱きながら、尚ポーシヤの獲得を願っている。それというのも資産のある娘と結婚して、借金の返済をしようという考えである。そしてこの放蕩にふける男に、アントニオは気前よく金の調達約束をする。ロレンゾウはシャイロックの娘ジェシカと恋仲になる。彼女は父もユダヤ教も捨てて家を飛び出す。その時持って出る金や宝石は、ロレンゾウのお目当てであった。恋の成就がロマンチック・コメディのテーマであるが、そのために金銭欲がからんでいるのが特徴である。よってキリスト教徒は利子をとらずに人助けをしていると自慢していても、そしてそのためにユダヤ人を見下すことができようとも、軽薄で傲慢の誇りは免れないのである。シャイロックの側に、正当性があるように思えるのは、決して誤った印象ではないのである。

だがこの劇を人種差別とかキリスト教の倫理という問題として捉えるのは、主題を見失う恐れがあることに留意しておくべきであろう。何故なればシャイロックとキリスト教徒の対立は、喜劇を書くために用いられているからである。それもフライのいっている自覚の欠如している人間を、嘲笑する喜劇を書くためなのである。我々はこれをシェイクスピアの意図の発見と呼ぶことができよう。それは彼の戯曲のすべてが、観客の関心事を前提に出来ていて、それ利用しつつ彼は己れの書きたいものを書いていたということが、認識できるからである。つまり彼は英国人にとって忘れることの出来ないユダヤ人に対する反感、そしてそれに拍車をかけたロペツの事件、これらの時局的話題を取り入れ、それを基に彼の演劇を書いたということである。彼自身も恐らくユダヤ人問題に関心があったに違いないが、彼の意図はそれを論じるのではなくて、これを材料に喜劇を書くことにあったのである。

この劇が喜劇であるという認識をもてば、シャイロックは欠陥のある人物、自覚の欠如している人物と見ることは誤りではない。すると彼は如何なる点でそういう人物と見なし得るだろうか。彼は金利による収入については、決して間違っただけを思っていると思っていないし、アントニオは彼が暴利を貪っているというが、それに相当する事実はここには発見されない。よってシャイロックは、商売の上でキリスト教徒のライバルになることはあっても、非難を受けようようなことはしていないのである。むしろ彼はすでに述べたように、低姿勢であり忍従をもって生きており、傲慢なキリスト教徒と対照的である。よって彼の生活態度は外見では、別におかしいところはないのである。しかし彼は次の点でキリスト教にない硬直さがあり、それが彼の欠点になっている。それはまず彼の現実的思考である。

Shy. Three thousand ducats; well.

Bass. Ay, sir, for three months.

(16)

Shy. For three months; well.

Bass. For the which, as I told you, Antonio shall be bound.

Shy. Antonio shall become bound; well.

Bass. May you stead me? will you pleasure me? shall I know your answer?

Shy. Three thousand ducats for three months and Antonio bound.

(I. iii. 1-10)

シャイロック 三千ダカット，なるほど。

バッサーニオ そう，三ヶ月。

シャイロック 三ヶ月，なるほど。

バッサーニオ 前にいったけれど，アントニオがその保証をする。

シャイロック アントニオがその保証をする。なるほど。

バッサーニオ 助けてくれるか？ 願いを聞いてくれるか？ 答を言ってくれぬか？

シャイロック 三千ダカットを三ヶ月，そしてアントニオが保証をする。

これはシャイロックが初めて登場して語るところだが，ここに彼の性格の重要な部分が露呈されている。それは徹底した現実主義であり，それも自分を中心に考えるという姿勢である。彼はバッサーニオの気持や感情を度外視して，自分のペースでものをいっているところが特徴である。シェイクスピアの劇中の人物，特に主役をつとめる人物には，初登場して語る言葉に，何かある種の暗示が含まれていて，それが彼の性格や行動に微妙に発展していくケースを我々は屢々認めることがあるが，シャイロックの場合も同様で，彼が裁判での敗退の原因となった頑迷で硬直な姿勢は，ここにその萌芽を認めるのである。この対話に続いて，シャイロックは **Antonio is a good man** というと，バッサーニオが驚いて，「悪い評判を聞いたことがあるのか」と詰め寄るところがあ

る。これは **good** の意味をシャイロックは借金返済能力のあるという意味で使ったのだが、それが誤解されているところである。「バッサーニオにとって道徳的暗示こそ根本的関心であるのだが、シャイロックの人間評価には、それが重要とはならない。後になって **mercy** という言葉の意味は、彼には何の意味ももたないことが、明らかにされるのである。」¹²⁾ とアン・バートンはいっているが、彼の欠陥は現実的であり過ぎるために、人間性を欠如しているところにあるといえるのである。

シャイロックの欠陥は彼の私生活にも現われる。それは召使いラーンスロットと娘ジェシカの逃亡の原因を作っているところにある。前者は「俺はあの人に奉公して干乾しになった。ほら指で触るとあばら骨がわかるぜ」¹³⁾ といって人使いの荒さを示しているし、後者は「この家は地獄、でもお前という陽気な悪魔が、退屈を少しでもまぎらしてくれたけれど」¹⁴⁾ といって家の中がどんな状態かを語っている。これらはシャイロックが守銭奴であり、家族や使用人には愛情がもてず、よって金や宝石にしか価値を見出せぬ冷酷な人間であることを証明している。だが彼のもっと仕末におけぬ欠陥は、彼の烈しい憎悪と報復せぬにいられない性格にある。そしてそれはアントニオの船が転覆したという噂が入ったとき、彼は復讐心に燃えて一步も後に引かない頑固さとなって表れる。

... I

am a Jew. Hath not a Jew eyes? hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter and summer, as a Christian is? If you prick us, do we not bleed? if you tickle us, do we not laugh? if you poison us, do we not die? and if you wrong us, shall we not revenge? If we are like you in the rest, we will resemble

(18)

you in that. If a Jew wrong a Christian, what is his humility? Revenge. If a Christian wrong a Jew, what should his sufferance be by Christian example? Why, revenge. The villany you teach me, I will execute, and it shall go hard but I will better the instruction.

(III. i. 60-76)

・・・私はユダヤ人ですぜ。目がありませんかユダヤ人に？ 手、耳や口、五体、感覚、感情、情熱がありませんかユダヤ人に？ 同じ食物を食べ、同じ刃物で怪我を、同じ病気にかかり、同じ方法で治り、冬は同じく寒がり、夏には同じく暑がりませんか？ みんなキリスト教徒と同じですぜ。針で刺されりや血が出ませんか？ くすぐられりや笑いませんか？ 毒を飲まされると、死にはしませんか？ もしもあんた方から苛められりや、復讐しませんか？ あんた方と似ているんでしたら、その点でも似てるはずですよ。もしユダヤ人があんた方を苛めたら、へり下っていられますか？ 復讐ですよ。もしクリスチャンがユダヤ人を苛めれば、我々の忍従はどうなりますかね？ 復讐ですよ。あんた方が教えてくれた悪業をやらしてもらいます。間違いなく上手にやりませ。

これはシャイロックのキリスト教徒に対する挑戦である。ここには並ならぬ決意が表れており、その真剣さは喜劇を超えている感がある。よってこれを彼の欠陥として嘲笑の的にするには、困難に思えるのは自然であろう。その上彼の主張が、平等の権利の主張というヒューマニズムに基づいているために、正当性をそこに認めざるを得ない程の説得力をもっている。喜劇としての解釈が難しいのは、作者がシャイロックの孤立した悲劇的境遇を、かなり強調して書いているところにある。

シャイロックが現実的であるのに対して、キリスト教徒は空想的でロマンチ

ックである。それはアントニオを別として、彼らは恋をするということだけでなく、思考が楽観的であり、遊びが好きだという点にある。バツサーニオがベルモントにいる美女に求婚の旅に出るという設定は、伝説的であり中世風であるが、それに要する金を借りるのに、友人が保証人になるという話は、友情のためとはいえ、現実にはありうるものではない。しかも借金の契約は、アントニオの海に出ている商船が、商品を積んで無事に戻るという仮定のもとで結ばれており、これもきわめて不安定な話である。

... Should I go to church

And see the holy edifice of stone,
And not bethink me straight of dangerous rocks,
Which touching but my gentle vessel's side,
Would scatter all her spices on the stream,
Enrobe the roaring waters with my silks,
And, in a word, but even now worth this,
And now worth nothing? ... (I. i. 29-36)

・・・教会に行って

あの聖なる石造りの建物を見れば、
すぐに危険な岩を思い出さずにいられない。
船の脇腹にちょっと触れただけで
積荷の香辛料がみんな海に飛散して
絹は怒号する波を覆うかも知れぬ。
つまり簡単にいうと、たった今あったのが、
次の瞬間無くなっていることさ。

劇の冒頭の会話で、サラリーノーはこのように、海の危険と積荷の不安を語るが、これがアントニオの船に起り得る不安を暗示しており、バツサーニオを

はじめキリスト教徒たちは、シャイロックと対照的に、宙に浮いた形で出発している。彼らは借金をするとき、それが賭であることをわかっていないし、よって自分たちの運命を予測することはできずにいる。ここに彼らの現実に対する認識の欠如があり、それが弱点となって、悪魔の付け込む隙になっている。よってシャイロックのキリスト教徒への攻撃は、起るべくして起っているといえるのである。

だがそういうキリスト教徒でありながら、彼らにはシャイロックにない美点をもっている。それは何かというと、事物は外見と実体は違っていて、外見の価値が大きく見えれば、それだけ実体の価値は小さく、逆に外見の価値は小さく見えると、実体の価値は大きいという哲学をもっているということである。

The devil can cite Scripture for his purpose.

An evil soul producing holy witness

Is like a villain with a smiling cheek,

A goodly apple rotten at the heart :

O, what a goodly outside falsehood hath ! (I. iii. 99-103)

悪魔は目的のために聖書を用いる。

神聖な証しをたてる邪悪な人間、

それは頬に^え笑みをたたえた悪魔さ。

美味しそうなリンゴも芯は腐っている。

外側がよく見えても、それは偽物だ！

アントニオはこういって、自己を正当化するために、聖書を引用するシャイロックを非難するが、それが当たっているかどうかは別として、この言葉はこの作品の中心的テーマを暗示していて興味深い。それは外見や形式にこだわらずに、実質を重視し尊重することが大切であるという倫理を、譬喩的に語っているからである。そしてそれを具体的に示すのは、ポーシヤを獲得するための箱

選びの場面であることはいうまでもない。いくなればキリスト教徒たちは、シャイロックに比べると現実性に乏しく、実用的な人物ではないが、聖書のいう「にせ予言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。」(マタイ 7・15) という言葉を信じているが故に、このドラマの主演になっているのである。これはキリスト教の精神が中心におかれている作品といえるのである。

ポーシャと裁判

アントニオやバッサーニオたちは、不安定な立場にあることを述べたが、ポーシャもまた同様に、自分の運命を予測できない立場にある。彼女の場合は父がすでに結婚相手を定めていて、それがしかも籤によって定められるという非合理的な話になっている。彼女はバッサーニオを好いているが、彼と結ばれるには、彼が当り籤を引くという偶然に頼るしかない。このお伽噺は昔からあった寓意物語で、中世の物語集 *Gesta Romanorum* にあり、シェイクスピアの時代には英訳が出版されていた。この英訳本は1577年に出版され、1602年までに七版を重ねている。すでに述べたように、シェイクスピアはこの話を、箱選びをする人間を通して、外見や体裁にまどわされ、かえって外れ籤を引くという愚かさを示すために用いている。そしてバッサーニオが、一番価値の低い鉛の箱を開いて、ポーシャを手に入れる話は、慎しみ深い態度と行動こそ幸運をもたらすという寓意があり、観客の倫理感を満足させたことは想像するに難しくない。だがシェイクスピアは、この話を通じて、物語に重要な展開を起すべく利用している。それはポーシャの本筋への参加の道を、これによって開かしているからである。そもそもポーシャの役割は裁判官に紛して、シャイロックの要求を退けるところにある。いわゆる彼女はキリスト教徒の救世主の如き活躍するのだが、この見事に裁きを見せる賢い女性を、どのようにして登場させ活躍させるかが、大きな興味になっている。

(22)

シェイクスピアの描く女性の中で、ポーシャは抜群の素晴らしさがある。それは機知に富んだ軽妙な会話をするだけでなく、希望に溢れた明るい現代風の女性を演じるからである。彼女はまずベルモントの姫として登場するが、そこで彼女は父の遺言に束縛を受けているとはいえ、伸びやかに明るく生きている。この潑刺とした健康的な雰囲気は、憎悪と冷淡な振舞が日常となっているヴェニスと比較して、非常に対照的である。このベルモントから救世主が生まれてくるということは、この町が特別な意味をもっていると考えてよいだろう。アン・バートンは次のようにいっている。

シェイクスピアの喜劇の殆んどには、ある局面で、生命に活力を与え、稀に見る性質を備えたある場所を目指す旅が含まれている。ベルモントはそういう種類の所である。ポーシャの家は、海を渡って達するところの明るい空の下にあり、森や芝生のある夢見るような所に在している。そこには昔の音楽や謎解きの遊びがあり、お伽噺にふさわしい無尽蔵で数えきれぬ財産があつて、^{かね}金が必需品として尊重され、稼ぐのに痛ましい思いをするヴェニスという雑踏した都会とは、明白な対照をなしている。しかしながらベルモントは、ある意味で実際にはヴェニスの良い面でもあるといえる。そこは透明で秩序があり、物質主義が変貌させられた世界があつて、この喜劇でキリスト教徒の特性である美德をもっとも完全に現実的な形態で表わす一人の女性が主演を務めている。アントニオと同じくらい寛大で、同じくらい考え深く、また同じくらい自己犠牲の愛を捧げうる彼女は、アントニオに欠けているところの直観と活力を持ち、健全な感覚とたゆまぬ反応がある。若い裁判官に変装して、ヴェニスをそのジレンマから救いうるのは、ポーシャだけである¹⁵⁾。

セル・ジィオヴァニの *Il Pecornne* では、ベルモンテは求婚を待ち受ける美女の住む国という程度の役割であるが、『ヴェニスの商人』では、愛と調和の

世界をもたらすところのヒロインを育てた、美しい理想郷なのである。ここでは金や銀に目が眩む男は退けられるし、ましてシャイロックのような現実主義者は、たとえ入って来ても、すぐに追い払われるのは明らかである。彼女を射止める資格のある男は、慎しみ深く控え目で、外見の価値と実体の価値が反比例するという真理を、よくわきまえた男である。あのアントニオの言葉が、バッサーニオの口から再び語られるのである。

So may the outward show be least themselves :

The world is still deceived with ornament.

... Look on beauty,

And you shall see 'tis purchased by the weight.

... in a word,

The seeming truth which cunning times put on

To entrap the wisest.

(III. ii. 73-101)

外観は実体を滅多に表わさない。

我々はいつも装飾に騙される。

・・・美人を見給え、

化粧が厚いと売れるのがわかるだろう。

・・・ひと言でいえば、

狡知にたけた人が、賢者を欺くために装う

うわべだけの真実。

この外見と実体の相違という観念を、懐疑主義と結びつけないのところに、この作品の明るさがある。というのはバッサーニオもアントニオも、この概念を言葉に表わすことによって、人生の観察態度がより深みを与えられているからである。そしてそれに反してシャイロックは、現実的であり理性的でさえあるが、一面的な観察しかできない人物として描かれているのである。

(24)

ポーシャがヒロインとして資格が与えられるのは、彼女が裁判の場でアントニオたちを危機から救ったことにあるのはいうまでもない。そしてそれは証文にない血を一滴たりとも流してはならぬという、彼女の知恵によるのは誰も知っていることである。だがそれと共に彼女がシャイロックに、その頑迷な態度を反省させるべく、慈悲の精神を説いたことは、これまた有名な話である。シャイロックの主張は証文通りの要求で、それは全く合法的で、何人も反論することは出来なかった。公爵は彼に憐憫の情が湧くのを期待して、慈悲を示すよう勧めたが、それは全く効果はなかった。またバツサーニオは、六千ダカットを用意して、借金の返済以上の償いの用意ができている旨を述べたが、シャイロックは聞き入れなかった。このユダヤ人の主張は、証文の内容を超えて、完全にアントニオあるいはキリスト教徒に対する復讐を意味していたのである。

裁判官に変装したポーシャは、裁判官を演じることになる。彼女はすでにシャイロックの主張は、法的に正しいのを知っていて、判決はアントニオにとって不利になるのがわかっていた。そこで彼女は公爵がしたのと同様に慈悲を示すよう求めたが、慈悲とは何かという資質を語るところが、公爵のそれとは違っていた。

The quality of mercy is not strain'd,
It droppeth as the gentle rain from heaven
Upon the place beneath: it is twice blest;
It blesseth him that gives and him that takes:
'Tis mightiest in the mightiest: it becomes
The throned monarch better than his crown;
His sceptre shows the force of temporal power,
The attribute to awe and majesty,
Wherein doth sit the dread and fear of kings;
But mercy is above this sceptred sway;

It is enthroned in the hearts of kings,
It is an attribute to God himself;
And earthly power doth then show likest God's
When mercy seasons justice. (IV. i. 184-197)

慈悲というものは、強制されるものではない。
それは優しい雨の如く、天から
大地に落ちてくる。それは二度の祝福をする。
まずそれを与える人を祝し、そして受ける人を祝す。
それは偉大な人物がもつ、偉大なるものである。
それは王者にとって、王冠よりふさわしいといえる。
王者の笏は、地上の力を表わし、
畏敬と威厳の標章であって、
そこには王への畏怖の念を生じるが、
慈悲は王笏の権威の上にある、
王者の心に座していて、
神ご自身の性質をもっている。
よって慈悲が正義を和らげるならば、
その時地上の力は、神の力に近づく。

ここでいっていることは、慈悲は神から与えられるもので、神ご自身の性質をもち、よって慈悲は神そのものを表わしていることである。それ故慈悲を示すということは、神の心を表わすということであって、それには神への信頼を必要とし、シャイロックに慈悲を求めるのは、彼の主張する「正義」（これは人間愛を無視した正義である）を信仰によって考え直せと諭しているのである。キリスト教では神がすなわち愛を表わしていて、神を信じるということは、その愛を受け入れることであり、人を愛するということは、その愛を伝え

(26)

ることを意味する。これは慈悲を人に示す場合も同様であって、慈悲は神の愛と全く同じと考えてよいのであり、神の愛を表わすことが、慈悲を表わすことに通じているのである。また慈悲を示すことは一方的に与えて、返えされるものがないというのではなく、与える人と受ける人の両方に祝福があるといっていることも、キリスト教の精神に由来する。すなわち神から与えられるものは、それが愛であるが故に、もし人に分け与えてやれば、そこに平和が生じて互いに愛を覚え、その結果、二度の祝福があるというのである。慈悲とは自己満足でなく、人と人との間に和を生み出すことであり、これこそポーシヤが望んでいたことであった。

しかしシャイロックは慈悲を受け入れなかった。彼はあくまで証文の通りを主張して、それを譲らなかつた。この強硬な姿勢は落し穴であった。それはこれがポーシヤのいう血を一滴たりとも流してならぬという条文が書いてないという理由で、逆に利用されてしまったからである。つまりナイフを人体に刺せば、血を流すことは当然であり、そこまで条文に書くことは常識ではありえないのだが、それをポーシヤがこの場合逆用したのである。何故このような非論理的な論理がこの場合通用したのかというと、それはシャロックの強硬な態度の反動だったのである。つまりシャイロックは自分を完全に正当化してしまっていて余裕は全くないところへ、証文の文章の表面的解釈をつきつけられたのである。そして彼は己れの弾力性のない姿勢故に、何ら吟味することなく容認したのである。いわばシャイロックは余りにも強硬であったために、ポーシヤの詭弁に惑わされて屈服したのである。彼の敗退は非合理的といえるであろう。しかし意見を主張する人間の態度が、正常でなく利己的である場合、それに同情する余地はなくなり、非論理的な処置がそこでとられても、それは人情として理解できるのは、論理を超えた人間感情の働きがあるためといえるからである。シェイクスピアはこの滑稽ともいえるポーシヤの処置を、ごく自然に成功せしめたのは、彼の人物描写が優れていたことによるのであろう。そしてシ

ヤイロックをやはり欠陥のある人物として描いていることに、我々は納得できるのである。そしてそれ故この作品が喜劇であることも容認できるのである。

注

- 1) Northlop Frye, "The Argument of Comedy" in *Shakespeare, Modern Essays in Criticism*, ed. by Leonard F. Dean, (Oxford, 1980) p. 81.
- 2) 今井登志喜『英国社会史』 上巻, (東京大学出版局, 1965) p. 58.
- 3) *Ibid.*, p. 110.
- 4) *The Merchant of Venice*, ed. by Sanki Ichikawa and Takuji Mine, (Kenkyusha) p. x.
- 5) *Ibid.*, p. xi.
- 6) *The Merchant of Venice*, introd. Anne Barton in *The Riverside Shakespeare* (Houghton Mifflin Company, 1974) p. 250.
- 7) I. iii. 111.
- 8) I. iii. 112. 「…人殺し野郎」とは1144年のユダヤ人によるキリスト教徒の少年殺害事件に言及していると思われる。 cf. *Everyman's Encyclopaedia*, Vol 7, (J. M. Dent & Sons Ltd, 1967) p. 210.
- 9) I. iii. 113.
- 10) I. iii. 114.
- 11) I. iii. 131-132.
- 12) *The Riverside Shakespeare*, p. 251.
- 13) II. ii. 113-114.
- 14) II. iii. 2-3.
- 15) *The Riverside Shakespeare*, p. 252.